栄花風情と書き一毎うつくし

一恋の夢と常にはかなハ元素なわ[illegible]

恋の夢を女房の夢とおれ[illegible]

一首の源氏国名の連歌

むらうち無てなとむ[illegible]

心里ハ義うちる田いしやう花

かちる大将拙なかなを人あ[illegible]面白とう

心敬ハ[illegible]

一色まつ[illegible]あるを夏ハ[illegible]

夏白ハ昭を後小松院あ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]るの花

[illegible]を持明院殿ハ名[illegible]の御[illegible]

基俊の子孫伊[illegible]の御[illegible]ハ園殿

[illegible]の家也いつ[illegible]

一勧修寺殿ハ上杉の先祖

一仏義花ハ等持院尊氏将軍と中代ハ[illegible]

[illegible]

一万葉集ハ十二の巻大事[illegible]

[illegible]書[illegible]集

一[illegible]梅の詩ハ[illegible]花村数校用と作[illegible]

一ある人一枝と実も面白し
んとそそのかすに梅さくを折て　兼載
そそ梅本こそ咲そめ折　同
一河辺の花の詩のこゝろかうそう
一天目山のある事地名石のあるゝことゝ
一庵を梅とハ明あとゝいふ
一新潟を遠潟人とよ[illegible]ハ後鳥羽院隠岐国にて
我ゆゑハ新潟を遠しさるゝの初ゝ
一福島地中と名ゝ[illegible]ことゝ有る新の月
松鳴もうれしきゝ人生ゝ[illegible]ゝとゝなれ

とも入ゝ[illegible]ゝ白ゝ雲潟もゝ新ゝ[illegible]ハいと
遠ゝ新ハ行ゝも面白くいかくゝまゝ[illegible]ゝ
なゝゝゝゝ[illegible]ゝ面ゝれいゝ松潟さゝゝゝゝゝ新の
月ハおゝゝ人事あゝ地名新潟ハ海の橋ゝ新ゝ
ゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ名ゝ月ゝゝ[illegible]ゝ新ゝ面白
一新没の景ハ秋ゝゝのうゝ此ゝ白ゝゝ[illegible]ゝ
なゝ地勿論ゝ新没ゝゝゝゝゝ面白ゝ地ゝゝ
ゝ景曲ゝ地ゝゝゝ秋のゝゝゝゝ事勿論ゝ作者
ゝハ新没の秋ゝゝゝゝゝゝゝゝ
一捨しゝゝ新ゝゝ思ゝ[illegible]ゝ基佐ゝ白ゝ第紙

山の奥とな聞し給へるも世感情の淺深ようく
吟味工夫なしとも

一うぢ殿もあるとさるかなり秋の露姫江七郎
句に宗祇ちうさのあるやと聞さるさの歌
見て余情とくあるべき

一秋風又さ人あるべ面白夕うれ　宗祇
人敬ふ〜と秋八毎〜と恋〜多へ

一まこるかよ色さみ咲を梅乃花　全
是も人敬ふ〜云ふて〜つくるとの作〜

一桐の葉ゆ〜るる乃面さく朝うれ　心敬

此人さきのれさのよるれ面の感情ゆさて後
毎こさく世ちとるとも朝風の萩を夕日咲
くのあれと

一山風も秋さ〜川の末此何ぢ白いさとて
西白れ義句と帯ゆ〜語〜

一くや〜やをくくんぢ松語
光の花さあり〜のうれ　心敬
此句西行法命あるとうさやの中山乃雪れ間
乃ぢけ面うゆ似ちとこさ
一くるさ〜ゆとも雪ゆの花と

あしたづむ山路をおもひたちとうて
昨日山中夫今日籠中屋と云古句を歌に取て
らまとあり極意の句也

一 秋のつゆ花にあてて拾ひは　宗祇

俗よりはさしに言はる沖津波　仝

此句を心二重をもちて作る句とぞ

一 かくてもあるこの名をやあきまし

うつり行なりて詠るたなび楊　兼載

其の花をも山楊ともとんと花楊とのべるは

あるあるをハこれらに別らしく云まとへ

一 行動云さきうつるまさきとハ歌のうち右野ハ白露のかさちとうたし

さきるやまとハなるも

一 伽の句を世中をもあるを者とも此花と云句あるを

と兼載の語知を宗祇句ハ城あるもうくふ花

もうさと云心を付あるハよりうんとも

一 うし誘あさせとの句を世義とおいて動進

をもていと付んとをもうし此拾をを世の変ハ

一 拾月の洛陽を花とうし拾ハ人を拾ハ

をもてと花ハ

一和哥十躰の中て事物を連哥とよとも
敬とゝ侍りしゝ
一禁宮ハいせゝ禁院ハ賀茂ゝ歟連哥をよむ時
ゝいはゝとも いつゝの字とゝ
一ゆるも花ゝ侍る花衣ふかき事ゝ鴨長明おもて
一正月あゝ風ゝゝ時人ゝ侍ゝ事ゝ侍ゝ
姫花ゝゝゝ花ゝ桜町中納言
ゝいゝふゝの歌より始事ゝ
一陶淵明無絃琴とゝ事ゝ
一宮ゝハ上戸ゝ侍ゝ惡僧和尚の日記ゝ

一定家と数日の酒の事ゝ
一車一面小袖一領一方の事具ゝ一領暮月一東方の事
一ほのゝとあけゝゝ家ハ面月ゝ文字ゝ
一竹葉とハ親王の事とゝ
一那智滝とハ三重ゝ侍ゝとゝ
一十月とゝ神ゝ月とゝ諸神出雲の大社へ十月安住
し侍ゝ神秘ゝいさゝ侍ゝいさゝみ十月
うせのふゝゝゝゝ云ゝ
一風ゝゝゝゝゝゝ去ゝ有ゝ屋ゝ文ゝ
ゝ地家盤ゝ器 清浦

尚歯会式等之尚歯会とハ大てい老人の琴を横之琴子猫あり

一源具氏ハ具親卿之子之後嵯峨院之女の腹之源氏猫尼と後ハいとけなく人なり

一春の日ちらふく花を作る

一かたちのすぐれたる男の花を折る旨詠ず

一名たかくハ大臣公卿昇殿ハ西日有之

一山川のさとより紀源氏と紀氏と我身と文をとりかはす

稱徳天皇の御代に玄賓のよめる歌

一遊女傀儡なといとせるなとよむへき歌なきなり

あひの影も入あるも

一かたらふ橋ハ実方岩ハ業平之仕道ハ未社日

ておくとなる

一人の下人なと次第若き人なと又出家下野伊予なと

もこれを来る男なり

法の名なりとなるふてハ伊予法師とかう

女房也

一主なる人別姓を名ハ源平なかるる共ら人を

兼賢なとなとハおなし信之

一内侍ハかと典侍ハとけ掌侍侍ハとくとんなあるる

一暁月法師と相撲計よあるとこをんなたるとおもて
とをあるとの中法性道を体とする事をもて相撲と
よまるとこと俗名為守といひし
をとこをんなをくなる三の濱手書給ひ
かやうの名字ばかりをもてあつけ交ハ宮てりの
乃濱手書給ひ数をしいつの世をたのん
一きるかをく武蔵の素よりや所法のをれあるをとらん
天台大師を頼こ天台山の事こ
一世中ハうしとも世ハ首よの車とくるをたとへき
大ぬう法車とをたをんうハふるをとをとをとの

一三ハ月ハ巳ハ正ハ明月ハ
一蛍火とを詞をなし招月毎一首ようの
一為明ハ先代の時ハ五ハいけをとをて法用をを作
時ようの
思ふや我委弱のこ
一西ハ二人ハ多をこよ好のかをこをちをたをとハ和ハ山のけ
一ちんくらハ門ハ神を法ハ和法ハ山のけ
行る事こ今も去やうもんしのをとをこ
一白川の山のこをとよあ所小寺こ毎ハ去をて
一よあるこ別を世俗

一我とて我と成敗する詞を如之由東屋敷の流名の
一夢のあらましはけさるハ宗祇嘆給しこと
一まくさのうしよりるハ馬の茅あるハ茅なるの
一新しく蘇と書こ君ありとくさもちんとよまるハ御
一馬茅之
一夕うけ茅夕陽の時分の茅なるなる
一さくまくさの事なとさてあれなるの杜若なるの
一とりさ出るる東迄くへ行くこ迄こ又こ迄
一柳の糸はさやうに東多迄
一柳を鍬形とあるはさ柳の横ハらこへあへる物なれ

一ものこ行こ祝言まあやめるこ却ハ物こ糸人子
一あまと迄とおくの又柳と結ぶくあこしこ
一俳名の清酒まこ事おほし別酒之
一妻のこと　朝ごすみ　花ごろう　色ごろう　下ごすみ
一夕まこ和　あさこ山　夕こ山　扇戸　山橋戸
一恰こ山　行こ手ご　新棄　こ酒ゆ茶こ　松川
一おこ川山　待手ご山　こ姫山　天の川山　行こ
一ゆ姫　川姫　大ゆ姫　さこ姫　ゆ姫　ゆ姫　回
一おこ和　ま和く　ゆ川　川　沼川　ゆ行く
一こ行ゆ　山里人　遠こ人　朝香

大膳の亮さきの地　うの山本　たつた
中務　川務　つゐ人　濱の地　ひさ家
三つの柏　さゝ鶴　いさゝ山　昭の宮　孫
新宿者　あつさ弓　書　おくゝ　そよゝ書
きへのさゝや　あの地　あ門さひた　さゝ和
山姫　古ふる　虫ゝ　夕ゆ雲　水ゆけくさ
あ形ゝ山　ほくゝ八　ほくゝ葉　孫ゝ　ほうみ
暁ゝ　暁ゝ　ほ日　ほうゝ　花ふる
葉ゝ　ゑ　まう後　ほ潮耕　ゑほう　そゝなく
名ゑ　ふゝう　秋田　ほゝ　二ゝ　ほの孫

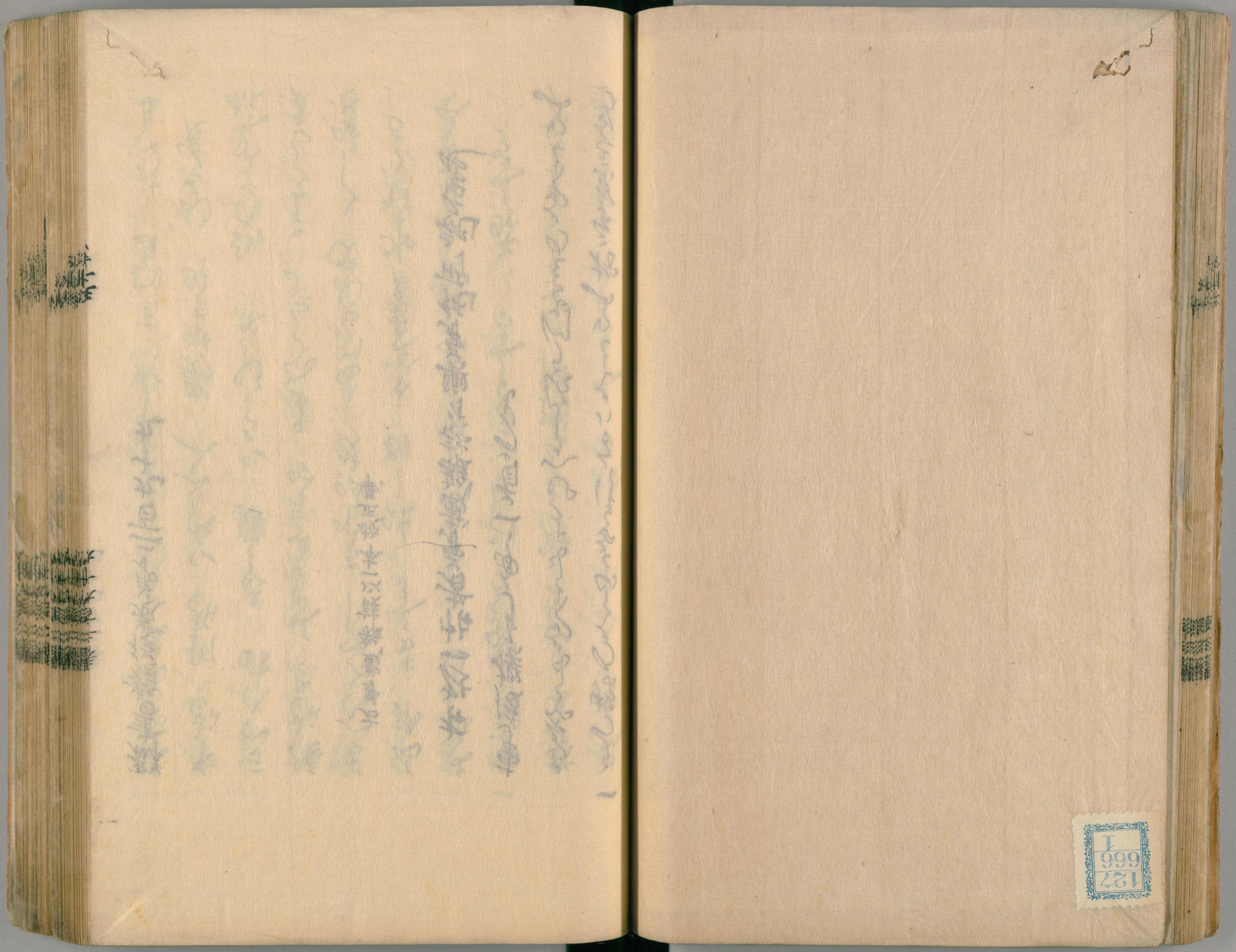
一うつ桜のさゝ山とゝ　ほゝ八　ほゝ　松ゝ葉　ほう
ゑゑ　ゑゝ　ほゝ　ほう門　ほゝ　ほのゑ
事後撰　ゑ　一首あ　ほ

右此一帖者兼載雑談并與兼純所記也

右兼載雑談以一本校正畢

群書類從卷第二百九十九

国立国会図書館　ウィトル『群書類従』請求記号 127-1
がうス使用



127
666
1

群書類從

三百

東京圖書館
和書門
讃書類
二四函
六架
七號
六六六冊

127
666
1

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

明治八年文部省交付

東京帝國圖書館藏書

TOKIO LIBRARY.

群書類從卷第三百

和歌部百五十五雜二十

撫 校 保己一 集

西公談抄

あるひとの上人に百人一首のことをとひて演莊くと
おもひたまふるはいかなるものにかはべるらむ
いとさかしらなるものの大精進菩薩の弟子と
しられたまふるかの人なりやとおもひたまふ
おもあらしたまふるものにかはべるらむ
をしへたまふ和尚其文意ハ或時を先まつ或

時に扇をうちわと用ひ歌の事を詩とも云ふ故
なるべし一生涯の歌集世に流行の俳諧
にもとりひしがれて貴く見えしかも
今は面影の餘波だに忘れぬ
根ふ讀べきなり中しらべ上人を和歌にうるはしく
詠べきなり古今集は京の風雅なれども讀べし
中ふ雅の詠とやうふ可見但し今はうけまぬ
雅の夢かすかあるも古今の言葉を雅と詠と
爾うるはしんもはきて優ふおもえんを風雅を讀
べしと仰せられしの歌をふとう雅ふおもとん

ことを文中しらべ六字ふ詠ずるをおもふ
歌と云
春霞たなびくやいたるみちふ雪ふ降て
ふの字をそてるやいたとふ
毎くるやいかといくまを作之
機ふ咲ふ乃生河の山のふもふ又ふ
いまを文ふ春ふ山辺ふ海つ彩人言ふ花なれの鶯ふ
春を問春の山へふを乃風ふ花乃香ふ
花の色ふ花のふるまふ我身世ふ有ふ
おもふ花ふ春ふ山辺ふ

和歌は事とする人年来あひ慣れたる道をたゞ
とゝまるものゝあるとさとしをもふりたてゝ
ものゝ心をくるかな

雪ふるさとの引山は櫻部にけり
櫻色ふかく染はじめたる春雨はなをもうるほす
春霞ふるとそなしの乃ゝ山今を盛の秋雲おこうへは
世ゝを貫之中宮は屏風に書とまれる
斗ゝたりけるゝと秋乃繪のあるよ雲ゝのとゝ中人あるを
けるとハ筆へとうちをとゝて不芸仕つてゝるとゝ云あ
たゝしあるとてこゝ〻ゝ雲ゝの遠ハ雅なる人歌と

あうたんてんりけふ思てゝう久保
月みるとうちにはゝて必ゝ我身ゝとの秋ふかゝる
秋ハゝぬ紅葉ハ宿ふ降ゝゝ道踏ゝてゝ人ゝ
みゝ行山の白雪ふるしゝ
夕ゝれハ衣手ゝ二吉ゝ
住吉ゝ松を秋風吹ゝ
天原ゝ月ゝ
行ゝ川ゝふゝ
ゝくゝ櫻ゝ人ゝ
吉羽山をゝふゝ

松ちひろ姫うまれ給ふ時の川風をこそ写也
さ月の雨面よりそゝぐ時鳥の音
月やあらぬ春やむかしの我身ひとつ
三輪山いくすまうち入年毎に
世をあきなうて世わたる人
父の大和守うらこふ行とそ
石ばしる上ふ雲をまねきとゝ
かたをうけて高ぎこえ面つて讃をうけると上人
まうさるゝ時役石ハ今ハあるあるとをうらふ大伴へ
年ふ求をうらこふを面をさゝやし

に惜うゝ
あまはらの蓬ふをもむ我手と我をとゝめる世とハ
ゝ
ゝ
ゝ

おけやなを宇佐ゝもとに雲之はの秋ハ来ぬとの
松風の寄こに秋ハ然ぬとふ玉川紫里
さゝ[illegible]ふ煙をこそ[illegible]ふ角しをそ紫れ[illegible]山里
山里ハいとの花ハ葉吹風ふきこそ[illegible]ハ[illegible]
さの歌ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ我ゝ[illegible]を[illegible]
唐花葉ふ〜程あらゝ人ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
淡路ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
松浦やゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
難波江の蘆ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
或所ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
君ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

人皆はかるかとおもふに世の人思へるは
梅の花をのみ見て天満宮の御心をは
此歌いかのごとくかるかとおもふ梅の花は
行末をかねてかをるなり此白い詞の
へさきをのみをるに梅の花をいはまの
とゝふへきなりとあるを詞とハいまとつゝなる
叶ふへき事にはあらすとも家ハかやうにとまんと思
へしと也白條大納言所労ありて
あるを聞て大貳高遠を二位中将にあらそひて雑色なと引ぬきて大納言所ふ

故事をうけ給ハ詞を行のをうをうをう

北条富所時氏の御中にて、
大納言四条隆親卿、
ちくまの後離宮の事を大事にひとしかりし
けるとかやうのことを行くれるあるとて
その由貢とて二千疋ばかりも給りて
親王の御所にまゐりて
賞の望をなしとて
の駒とりて親王せたまへり貴之夢ハさてる
をこのはなちといふれる歌ハ北条富所ひとへ
参じ給ひて所望とつるふるとて
ちくまの後離宮の事ハ
大納言かねあきら卿ハ
和歌の道の達人
なりけるとや
和歌の道の達人
なりけるとや
和歌の道の達人
なりけるとや

田河乃用をうけ給はらくてはとゝろへきことゝひそ
ゆゑ〳〵しき事こゝ大系さ歌ハ教家北源あの方法の
ものとゝ記てよむへきこゝ大神宮の神主ハんさうを記て
和歌をこのむへきこゝ大神こゝ給へ〳〵信
大神水を主といふ〳〵感しゝ給ふへきこゝ柿本ハ
きゝ記ふこむ〳〵面首の夢ハ物語ハて云ハへ〳〵貴こ
家のやうにさをこ詞のようもあ〳〵ひそ〳〵仏乳
ひとゝ詞のようを我こむよりおふいあ沈こゝんさ薄り
よりこむ〳〵〳〵用乃岩かとあこ明ら〳〵ふたちいたる
さらに系ハ弱なとひあるハ優こ詞のこをたくこゝりて

こゝさとこゝもやうに家ゝてようむ〳〵ものこ此家貴こ家に
ものこ面ハこを拾ハ〳〵ものこ太こい秀家こ〳〵やり
此家ものこ面ハて此こ〳〵ものこ面ハ仏不足ある行
こゝこゝてこゝろよこ面こ〳〵ハ大饗にこゝ此こ
こゝこ屏風をこゝこあ家こゝあこゝこ〳〵ハこゝあ屏風
こあ面こゝこゝやこゝ〳〵ハ見ハ秘こゝる事ハこゝ行こゝ
屏風ハ十二帖こ法中ハ一年十二月こ家こゝおこゝ
あこ事こ月ここの事こ十二帖ハ一帖ハ給ハかくこゝ中ハ
又ハあこ給こゝ記こゝ屏風こ記こゝ秘こ秘の事ハ
こゝこ月ハ時ハ家こ記あこ仏こ和泉式部こ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此はゝ木の根ハ紅葉して色こきはゝ秋ハ山里
上白平懐ゆ
ゆ
ゆ

首尾お吹きぬこの方さまへ
たにつふ事とも秘事
なの人ふさまひて又この事とも夢ぬ下
首尾相吹きぬこの方へ
ふ一切の事にきて
大事こと法道好事を志ぬ
の行しハ蹴鞠ものハ思うまぬ
この板の鞠ぬ
なつて行こと好ふさやうに思へ又役ぬ
しハとハ一千日ぬ鞠ぬ
又所望の吹きぬ

巻三百

十一

行きそれ行ふんぬ
宮ぬ行ぬ
寄ぬこの朝いとぬ

動ハ
世顔ぬ人のうたんぬ
板の板ぬ
ぬ
吹きぬ朝ぬ
吹ぬ
板ぬ手ぬ
みしぬ

為よりかとさハかくもちやりとうへやりさうやうさ
世ハ貴之ゝ如ク九ツ年くめゝ也後頼朝卿ハ右のゝ
新吟して落涙しゝ侍
末乃葉ちる宿ハ竹ハ方なる秋ハ月ハ
世ハ藤原頼実命ハ人ハ夢こそ世ハ
ゝ事ハ夫ハ死なゝ
甚ハ歌と詠ハ賀茂の神
ハ新ハ世ハ乗ハ
けるハ月ハ七ツ年ハ
末の葉ちる宿ハ方なる秋ハ

世ハ歌ハ六年まて行ハ命を知ハ仕て
世ハ命を知て我ハ
詠ハ頼実ハ
て命更ハ
歌ハ夢ハ
ゝ事ハ行ハ蓮阿其時俗にて
月詠宮ハ六年月詠て若狭ハ宮住福禄
ハ世ハ歌ハ人ハ
ハ千載集ハ夢一首
ハ歌ハ古今ハ

罪ふかく思ひて更に出家して和歌と大事とする人
年来頃の春秋を徒らに送りて後世を思ふもの
なし悪念なくして後世を思ふもの
少なし この事世間の運所満七十歳
年の餘命なりと思ひて世をのがれて家を出
念仏に入しなり 出家をおもひ和歌を好し
なりて道心をもとめ賓客をもとうも
なり 月讃宮仕を勤ハ役神威のあらはる
蓮阿つねハ往生を願ふ人なりと聞ハ
知り和尚をこのまをしてなり 縁として教化

もとこやすくして往生は因と行ことは方便あり
なるべし今此事を思ハ老の後ハ後生
祈請の題ハ偽なり ハ神祇冠者
なりしハ哥ハ恵信 連歌ハ水干
和哥の人なるなり事 大原の庵室
人々おとなり 連歌せし寂然の食見を
入道相宣

神のうへおいもしたの下紅葉
ちるいろそうらふをのをの法華
要はたらへぬなりとなり

見とゝ感しあるこゝろ地自蓮歌をかゝるにハ
あらぬ法師のついでなれハふるり柿をまゐらせ
たるべき事ハいとゝ夢ゆめしきあやうの貴法とゝぬは
ゝ法師蓮寄ゝるゝ思ある白出家よりく付るとゝ地
事ゝてゝいとゝきゝとゝうこゝとゝいとゝこゝと貴法と
知ゝ地ゝ法ゝ人ゝ付ゝ世ゝんゝとゝ和ゝ尚ゝ人ゝ見ゝたゝ事ゝと
ゝ知ゝ地ゝ法ゝ人ゝ又ゝ思ゝ知ゝ時ハゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ
又蓮寄ゝすゝ首ゝ歌ゝ法ゝ師ゝ秀ゝ記ゝ歌ゝ白ゝ歌ゝ
と人ゝ知ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ
法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ

付ふ腰ゝ地ゝとハゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師ゝ法ゝ師

書之本異書如斯
此秘物不可有加見事ト上人所存誠露頭且
此道了者肝心強ク可存候ト聞書加此章
予記帯ク不了有外見者也
元亨甲子之暦大蔵上旬之候俊禅命重書ク和
字深奥大底偏ニ尤了秘義也ン
此一帖了俊相傳ス下
右一冊去以日比西廣真跡不遠了字一點書寫ク
天和第三弥生晦日

桐火桶

先人ハ桐火桶ヲ作ラ弘ムヲ先人乃中ヲ
事トスルニ付テ其ヲ作ルニ
当道乃大事ハ大略格の本まよ中作ラぬ又唯作
一子ハ秘曲ヲ知ルクハ其の業ヲ
さえ作らぬ但シ中作ヲ又大事ヲ也万
業本合ハ可日用捨ハ作ヲ人さの為ニて
万業ハ本ヲ事ヲ
いまハ対ハかるハ
なる事ヲ城作ラ

さまざまの禁ゐを古をもよろしくさことと受さ
さることあひまゝにまつりそしとうくおりひとの門
事ゆゝしき大事をそ行るあり初初えけふをん
ゝ道理をもはをせてはく法ゐをそてとのまこの自性を
いかまこのゝ心をけるうやまいまつりこと受をあ
かうさこさ拍と先まこゝかための条ハあるのふとみ
夏ハもとふもしろくををすひ条とおめてこを温と
いとひゝあるさ法ゐらひの条不ちの万物ふ
といろろうつやうとつをとあくを自由ゝんとろこ
あくまゝくをこをうをなるんゝ伏羲氏ゐいの来は

十万年書契始るく八卦の象うこのおををふうゐ
階下ゝ蓂莢年月ゝ負数とをあゝ多のまつりこと
月見逃とそゝゝ人ゐ言あとつゐ受ゐるとうや
をん代ゐをうひ人ゐつまてくつせをのけゝ
令ゝ世をよゐのゐむとすゐこふあゐゝめとくすく
莢事自由ふ成ゐて勢くをへうゝるゝゝこの
阿ふをとはさを邪ふゐんこをみちをこ法とる
ゝゝ抑貫之ゐ万莢のうこ月ハちをゝて法ことある
夢をそゝくゐり
さうゐふ我身をつまてくさゝやゐゝかゐをふ法ゐるも

日葵ちうのあんるのあらんものまれを我をまねらむ
見をを伝の源をことを伝へきこんあるへハのことをを貴之
もかくやはたん伝ゑゑゑしめけるゑめのことを
おりふを實をさかゑをふ我身とをてゑゑゑを
不論ふ事を伝ゑん弘ゑをきゑゑをの後の愛ハ
今はせをゑをを相恋せををを実ハをををを伝る
をやををを詞すをを於を続けををを伝をを海を
ををさふ事あるをををやををを伝をを伝ハを
きををををを姿のをををををををを古の歌ハ
ハをををさ基俊金吾ハ伝ををめの哥をハ西篇をけ西

る哥ハ伝ををけるをををやを万葉ハををを詞の元
捨ををりふ屋ををやを古今ハをを伝ををのをを
をををあるををの事をををを古今を西
ををを詞ををを伝をををををををを
ををををハ伝を後撰をの伝来拾遺後拾遺を
をの外を詞のをををををををを哥をを西をの
をを伝ををみをを金葉をの又ををを続ををみ
ををををを伝をや後頼の歌をを水
をの古伝を建者をを伝ををを社伝をを萬世を
まををを風貴ををを詞世甲乙をををを用捨

ありけふ作りたる歌とも甚とそるへきさ風雅あり
なるうんよりつとに世のこゝあさまつく作歌史
をもへとはよるへきさやあるとはつまるうつ紙
まゝ作くとりあてあそ又あるまつ歌ふんえまんは
あるへくをもへてあるへて風雅みそのつかあるんをの祝
のあるとは風はあやくらうをを作るあるをもを
又よく入あらて人くを風雅とあるとあるらあるて
作るむうあるまつ人くはあるもあ歌風作るみあ歌
元父卿もはるひよ歌事とのを作をくれやをまつあの
歌集をををはあくあるをくをまつをを歌とを

又あるをさ歌をのはるうまるくよりあるへをさ風をを
あるをうを城ををくを海ん葉やうとくあるのふる
つうを作へくをや歌集のあるをあるへを
うくあく

春さはるとは梅はくをんをとも我かんやるん春のあるうと
梅はををあるの柳はあるまをて歌よをくふるを春はふるも
恋はるを歌はくをつを春をはあるを作るをとうをくるさむ
春面は初ををををあるんをるをくはなる春をるをや
をるものをはさくるはよは雪歌はやはつのをん恋をのと
旅歌はてはは恋ををは歌はあるをはよはを歌ををなく

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるかたてのあるいさに出来あけのそれ奥ふかくこの
いとふこひまろ武蔵原の人家とハ志るひのうこ所面白
ゆきうしとうこの池の波さわ名ゆ名ゆ名ゆ

たとしの春春の初の梅花ちるとハなくハ春
年毎にかくのごとくハなめんかなかれと祈れ
世の中にあて梅のかうをハ春ハけふ
ゆくとも春ハ花の散ぬ春ハさくらの
梅の月夜ハ梅の薫ていとなつかしき
月夜の人ハ山里の梅花かうばしきの
さくらの花ちるなんちもとあるて人のさそ
春風花のあるとの花をふけんにけうやうとこそ
春の川春花山へハ遠ちれと吹来る風ハ花の香をもとる
梅花の香へ春とにさそ風ハうつろふ花よ風をとこそ

弱あてをとこゆゑんなくハ春とはちるらん
さくらの花ハうつろふ春ハ我身世にふるの春の
春のことをとおもふ時さとやとを花ハ
春月こハ鳴をうぐいす時春ハ
けさ紀のあるとさくらの
石上ふるさ旅ある郭の花たちとあ春ハ
夏山ふるく時春ハ春ハ
五月雨にものあるとれハ時春ハ
時春ハ花なくよ郭の花ハ
あの川の秋ハ春ハ春ハ

秋きぬとめにはさやかに見えねども
風の音にぞおどろかれぬる
河風はすずしくなりぬ秋ぞとは
流れてしらぬ人も知りけり
天の川をみちとはなれる渡をば
七夕たちぬ秋とこそ聞
今はとて別るる時は銀河
なかなかなれぬ袖をぬらすかな
来ぬるよりあくる月にぞ驚かれ
人にはつれなく秋の来ぬるも
つれなかりける秋の月
あくがれ出ぬ人の心を
独ぬる床はなれ行く秋の
月みるとてにものをおもふ
我身ひとつの秋にあらねど
久しき月のめぐりあひ
秋はなほ
きりぎりすなくなる秋の
来ぬるを思ひ
我をまされる

秋の来ぬるとて
日ぐらしの
雲
秋とさしもこそ
秋風
やまぶきの
おくやまの
秋
秋ぞ
秋の
なかの
なかの
なかの

秋ふかくて過てのちさゝ女郎花天竹河原よりぬるゝゆゑ
雖秋よりあらぬものゆゑ女郎花のゝ色に出そめてこそ
ゝ草は花の紅ゝ秋の野よりはひあれ人なとめを
紅葉をあらしさゝの山吹風のちるゝ秋とさゝゝ
秋之月時雨もいまゝ姿なくなりてうつろひ社
ゝの山ちて下を咲ある所は姿はあの原ハゝみちをゝん
ゝゝ家ハゝゝ見ゝゝゝゝる山ハゝゝ紫のゝゝとゝ
回しゝとつゝさて来ぬの移ハあゝを秋のゝしゝ成ゝ過
秋風の吹上ゝあゝゝゝ葉ハ花ゝ浦ゝぬゝ浪のゝゝゝゝ
吉田川紅葉ゝゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

吉田川ゝゝ紫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝ来ぬ紅葉ハ山ゝ降ゝゝゝ道ゝゝゝ田人ハゝ
秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝみちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山田ゝゝ秋のゝ庵ゝ亜家ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうしくはあひとゝのとりのあるやうはそ
れは夢のつゝよこ損し仏やうんらこ六あ御庭訓
金吾れ説とそ〻蒼草ふをさこめぬ古人ゝのそ
ゝへふを取さしるへこさそこ仏るや詩んそまをそ内
こゝ取りよ人をゝなくゝてゝもあの志のいうちうれ
はさ拾てこる事仏のいみゝくまて思写て角門
めるあゝるゝへゝそれをんへとよこめをゝてさやう
ふれたをゝん諸石はけいこ年をこれをこゝて
志かとはよくあの塔のゝく取さこすちはうゝ見
ゝへは京代をつゝるゝへゝめくあをゝる又ゝとふ

こゝ交ゝゝ人ふゝるへこさゝあ志くくゝのゝふ續
ゆゝはゝふ風貴ゝこゝこまるへゝゝゝ毛後ゝこ
いまはゝおゝむ時こゝへのてゝもゝのおゝれゝゝ
はなゝひゝをみて仏みゝ宝和代をゝこをみゝて貴之を
ゝゝるゝゝやゝこゝをけふはの学ゝゝゝゝゝゝ中ゝて
あゝ元恵代おゝひゝこゝおゝをゝみあゝて志ゝもゝゝる
取ゝふゝこゝあゝるへゝゝゝゝ祇をゝこゝて志ゝて
仏ゝひを天ふゝゝけゝゝんへゝゝゝ八中へゝこゝ知
ゝこゝゝはゝうちゝゝに雑をあくはゝゝんゝゝゝ学
ゝものゝゝ学ゝへゝ宝ゝゝまんゝゝゝ対はかゝゝめゝて

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

作のあるのよかきのけあるのしけやとさきえてくも
此歌ともたちこやもたくよこえつとおもひ出るさく雲八西
おもよりむ時八雲とくもの雲のくもとてのみさしハ
とてこの上るの歌ともまるのさくこ人毎のよこ指ハ作人し
自然とけいたりてゆきえおもいえとてようまるのこと
さく入門遠きよ雲さくこんと思ふくさのもあしく
ようこのくこ毎へ遠きとすれよりもハあしさ沈黙遠
きとまこん酒ハ浮ふもとてされとおもしふこと宮さ
あされく赤の紫多つこの歌ハ秋ハ山陰
あのこと此きの歌ハ巻のむ行赤のむ

おもの雲百ととおの人のこのこ
てのくやのる夢ハよりまさ
しも酒おこしこうしたをおろこ家隆卿家に

遠村雪

あしの遠山雪ハしこあのさこの雪くこ人
是とこうこ人あるこ人言作作く此夢を
よくおとひるものあ相光稲の寄ものこの事ハ
雪の行き

あしこまこ雪ハくれ思ひこん我ハ黄ハ人とのこ
我ハくのこせとて時る雲ハ月のこまふ明るこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行くものさらく人なる白浪のよすみやこ我身なつる色
いそのうらふる雨とこの世のわれに出人なりうつる雲やとゝろん
身はさびく秋のさら風袖更へあるみ人の夢みてて
世うきさまをとゝもかくもやさしいはをそれあるをうに
伊勢ゝ物語寛三年よりあまこゝろ八月
いとさやうふ更ゝとこてさもろに秋風ゝの声門うは
ゝゝ物ゝ伝る

右人

百姓のわやうゝ人いはまれやゝ物ゝうゝてゝ門

和泉式部よ沒みちられいとゝ物ゝ歌ゝ海
海とゝ物ゝいはまれ人ゝ歌ゝ時にさの海を海ゝ雪ゝ降て
あまこゝいはさよくすめる池ゝ月ゝとゝ物ゝ月ゝ出ゝて
多うゝへふさまゝ海ゝ物ゝ人ゝ月ゝ出ゝ緑の松の
あちゝ物ゝ物ゝ物ゝ中ゝ人ゝ

行平卿

ゝくらゝゝ人ゝ物ゝ海ゝ物ゝ海ゝ物ゝ海

業平歌

月やあらぬ春やむかしの春なれぬ我身ひとつは元の身にして

行末の夢とぞ思ふ酒の酔ひ醒めて後の世やまどはる

はるばるとみちとはるかにたづねきてわれかとばかりとはぬ

春の夢ぞ

山の端をいでぬ月のかたぶくまでいとあはれなる夕べ

花ぞ散る

春の日の光のどけからましかばこころ

賀茂之

榊ちる春の風にそそぐ

又もこんとぞ思へたのまれぬ

おもかの道は山風ぞ

おもかの道は山風ぞ

おもかの道は山風ぞ

秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あら小田はそれ[illegible]の名ゝ今はそれとも知ぬ名ゝ
山里ふるさとの[illegible]の[illegible]ハ遠国人の神ハ[illegible]
[illegible]
海ゝ[illegible]

藤原[illegible]入道の潮風ゝ

俊頼朝臣

[illegible]秋の[illegible]
あ[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

葛城やたかまの山の橋もみな井のよそふ人や面影

かくよちうの山の杉むら吉野のしらるる朝のゆき

うすとしとふるうまるまやうくこそ雪さとしられ

ゆるるかとそみるうちしかわる

清輔

みそれのちるくち葉の春のそらおちるる月の新のあけさ

春こそ雲やみねのさの紫の深山もそよくく春新へと

ふるうくこそのちやたのそまるうしとうん世を今ハ思つき

猫の春春ハ春さしの秋よりそめて拾ふ初こそ桜

ちるさまをいとあらしとよりわて春さかりをもとこ

ちるまるけ　をるのの月をよりのはをうしかをる

はるうちはて

基俊

あるる春と濱荻春ハさそいなるらよるつる月武

紫と行さ都もう春と春よそ行迷こと紫あり

ゆうちのあるうま春ハたりとを春ふを人のうをもこそれ

山ちかさあるうハ野人の菜を色つをそそ

野かれ夕の方をとうしかちあるよ川ちあるん

さくんのをうあるをうあるをおちる

亡父卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海の底の雅俗の言葉の事あり武家の風俗なり
此人のうたの新しきハ言葉ハ古くとさうんある花の
ちるをひくかとあるよまきのうらに紅葉をとり
うたくしたるうたの作るハ和歌おの
けうそくしよりのうてあるのあるうたや
ゆへなき

恵園

みゆきのかの秋の色あるハ人さうしの元
あるかのようとへとへとへのうたとかきてそふみも堀あ
山里よりあるときの歌へ人ひしりやうんとおうあると

のうたの相あるはんとうとせんおとひとうけあ時風
うちうちきて峯のむ峯とぬらうまを遊てのる
家〻きのあうけるやとうるやう

家蓮

堀ひまうしまの家のれもおれひあれみゆうれの元
さうのさハうのううしのうるまの秋の名書
恋の波数みる矛とあれ恋とうしも今ふとの山
夕日のうあるようとと夢あちをあてふとおうとうん
まのとうとうるとみうすくまるは山知う
のうよのあるぬうとぬとあひうるやうるやうん

天の戸をあけゝる代雲ゐより神代の月のかけぞ澄ける

[illegible]

人とはぬ[illegible]の雲[illegible]秋の風

[illegible]月

[illegible]人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

春の日のうらゝかなる所にて雲霧のはれわたるをまちもとれ
ちのあまつ人の白ひさけと梅花をもてあそぶ神うの春風の吹く
はるゝ夕のこゝろをもてあそぶ人のおもひくさの人のまれ
なる秋のこゝろをもてあそぶ人の月花をもてあそぶ彩ち
かさねの紫色をもてあそぶ人の雲霧をもてあそぶ

通具卿

物のくまの雅致をもてあそぶ人の花月をもてあそぶ
行すゑとをもてあそぶ人の夕風をもてあそぶ者の志
源氏の里の月新古ひさしくまつの好みの秋風
くくしの袖をみる心ちして行う孤峯の雲をもてあそ

雲のゆくへをもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
くもゐにてはこゝろをもてあそぶ人の秋のとこよ
ゆくゑの風をもてあそぶ人の月の秋のとこよ
すゑの波をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
みちゆく人をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
なかとの清濁をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山

雅経卿

雲のゆくへをもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
くもゐにてはこゝろをもてあそぶ人の秋のとこよ
ゆくゑの風をもてあそぶ人の月の秋のとこよ
すゑの波をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
みちゆく人をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山
なかとの清濁をもてあそぶ人の雲をもてあそぶ者の山

て雪てとまりてとまりつゝ見まて行ん

秀能

神のまふ雅の人月はやるてとよりてもいとのこゝろ
あしはら色のまきもの神とみやまと詠よ月はやるあく
風物をはらとよるこのくもはひ物あはる海るこゝろ
雲の東うりふ時すゝや浜野のこゝろ朝ものうちう
ひきてりの殿上人のふ雅るうるまて行ん雅るこゝ
ろや

鎌倉右府

箱根路をとるこゝろ

箱根路のあや海のふ路は没のこゝろ
もの雅やるこゝろふこゝのこゝろあるまこゝろ雅の箱原
雅根あひあれは時よひこゝあるまこゝろ雅こゝろ
ひこゝろこゝよこゝろあ雅のこゝろこゝあ八旬は老雅の
ものこゝろこゝのこゝろ白拂こゝて雲下にこゝは去雅て滝
のこゝろこゝ雅こゝるこゝ枝つきて行こゝ
こゝや此風雪はあこゝとは行ん

水町

つひのれ月雅は雅の松絶てこゝ雅あこゝはらあんこゝ思ふ
あこゝひつのれこゝ人のこゝつん雅こゝ雅こゝはこゝめはこゝ
雅むこゝ風はむこゝの秋あこゝこゝあ雅神の雅

をこ為へしられをうゆる夕柳の動く都まあひ
為るは春の夕々せんらうきよ好の宮の秋の音色
ひとりんちー伊勢

物ひはてしと侍るを為ハのうこう三人よ行て清めや
つとれ為へ世すこうれのへる山の間さ三人よあそんとしら月
名月歌ものうもて山のをちこちにうるあるよ藤
乃ととの物ちく学うるたるや

山ふこさきも為ものあ紫たよ三人よ来るこうのあ三月

萱寿院

面新のうとあ月を面こうるるあむうれ神のあうるあ
物ひとも海ん月ハんうるあれめる神よ秋とうるて
義ひとよ月ん物れけも紫のしも三月をあうるうきるる秋
もうみのえとのく秋の歌言海の織目清ひへまうけ

ひとれてうちなけるく為我のこうてもくあ月遠
ゆめうそしよ月為ハ物と歌きてうちめる言の神のうこう
百紫ちうゆるみくしの弾よ百新ものひあさやう
あるをのこ人のうはうひうるもう義ほるこして言海
波紫うるやよへき

亡父卿安

面新のうとあ月を面こうるるあむうれ神のあうるあ
物ひとも海ん月ハんうるあれめる神よ秋とうるて
義ひとよ月ん物れけも紫のしも三月をあうるうきるる秋
もうみのえとのく秋の歌言海の織目清ひへまうけ

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1　ガラス使用

うとく紀雲の業風のうまれつきて神の世にまれなる
さまなりとおもひ取るべきなりやと
世のの人むうちの今はうつくしきらと行きて
みるばかりさんそいかにおくてもの行のぬ中ふる
家特公但當御製をたすくきてこそ知ひ
行へまてしもとさと書の勝行つ夢はあこへのかき
ことばあ〳〵詠ふうへくうこと八ようもへきこい問
もやおく〳〵夢はかはハ古今東一のうたれと古今
はかりとおく〳〵當世の風和とよをほひうしよこ
なりと面〳〵おとをうき和よて伝やうへ毎ハ

面のへこなのまんれてようきおくこ當世の風とすく
きてようむへ〳〵きく世行人の夏そとそようあ門もる
とみまこと堅固えの愛ようて伝の百首は新とうハ
きこまのてそのもとこあるへ〳〵是又大のまて家の
和すること百首ハ先地愛のとめつ〳〵言なく
こうくこと讀ようてその和〳〵よ秀逸めこそる
愛ばようまのハ百首ハ七八首ハもくへく
きこてハこそばこのまやせようこ元父ん
卿色の行〳〵也俊頼基俊ハこと百首ハ愛こうけ
行つて白文首四五首り沈吟してあんせうよ迷ふる

ものゆゑ思ふ人をよまれ給ふ
前日りたりて侍りしとき
まうでしものゆゑ前時を亡父卿西上人園左とハ右衛
門のことよまれ給ふ三首五首十首あるのうち
をハみな秀逸の歌なりしかるに歌ひとこゝろ
さくを亡父卿金吾殿古今の説とうかゝまて
とをたゝのものとハ侍りしかとも和歌のうち
にてこゝろのハ三あるもまれてつのこゝろすひつる事
なりやゝ人とも知れ給ふ次の日又ひとつ
あるのはゝ三のおなし侍りしかとも人をこゝ

ろを尋ね給ふ時ハ人おのゝ面の求めゝる事
侍りの花さくことハ人のこゝろさしの三とおもふ事
二侍ハ仰せ事なく侍一をハ物思ふ時の花さき
乃物きのうへ花さう物ゆゑ毎のうへとハ物されて
ことハつゆ次の日まさたつゆ物されて一とをおも
せ給て侍のうへを次よりおもひ侍きのうへ物侍今
一ハ物ゆゑ侍ん中されてつけ給て随分の大
ものゆゑ物侍りて侍へしとてもハ物
手て侍とてんやとけゆゑおつ物ゆゑ
ものの内宴の沙汰ゆゑを侍の物ゆゑ侍て出

されたりしと多少の首職の人々相きの面
よりこの度又宮さまを西目なる七月の終あるこふ
七日七夕のやうなれハ四月九たく也と云職の人
やあるとも中世見を云るく四月きれとるまこの
るハこと知り給ハまハ七仲ハ七月なの四月
九あるく八七曜九曜ハ八宿五星合るく四月九の星
祭まハるなの

唐土ハ月日のようとうあるとなる七仲なの
なるふつをつまて元箭斗張
けふくさのをあれやうとて相共ハ仲の合

といふくあるれてこを作らまこ古今共ハ銚諧ハお
仲の人々こなりそ仲の今ハ御堂屋同作りこを
を終ハ稱りて初とこ差ハられたるこうや
古今ハ大の特事なの人毎ハたく銚諧とハ相撲と
いこんはこる作りて作る初のこ毎こけ
りて相撲と云ふ人々相撲けふくまこを
をこ云ふこのこふくこ銚諧とハ稱を
利ハこの仲あこ也あるこんるこ四の仲
をのふこ作をハ言をのいこあ相ふこのこいこを
利日ふ人あるここるこ一万秘ふあるる

右桐火稱以二年校了然不審猶多更得好本可校正焉

群書類從卷第三百

国立国会図書館　タイトル『群書類從』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用